

---

# 俺とお前と俺の兄

国高ユウチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺とお前と俺の兄

### 【Nコード】

N1592N

### 【作者名】

国高ユウチ

### 【あらすじ】

パーフェクトプリンス  
完璧王子と呼ばれる男の片思いです。

傲慢じゃないが俺は完璧王子と呼び名が高い男だ。パーフェクトプリンス

容姿端麗、頭脳明晰、知恵才覚、スポーツ万能と何でもこなす器用な人間だ。

身長も183cmと高く、性格だつて悪くない。

男女共に人気があり、部活の傍ら生徒会長も務める。

それがこの俺、たかくらかすや高倉和也だ。

そして俺が通う進学校には、俺と対を成し完璧王女と呼ばれる女が存在する。パーフェクトプリンセス

閉月羞花、温和怜悧、英俊豪傑、運動神経抜群の彼女は、柔らかな栗色の髪をポニーテールにした大きな瞳の一つ年上の幼馴染。

高校二年にもなるのに未だに髪に大きなリボンを巻きつけているが、それがとてつもなく似合う童顔巨乳の美少女で、もちろん男女共に人気があり、生徒会の副会長を務めている。

それが彼女、やましなすず山科珠洲だ。

高校一年の俺からすれば一つ年上の女だが、今までの人生の中で一番近い位置で彼女を見てきたと断言できる。

そう。珠洲をずっと見ているのは俺だ。

それなのに、ああ、それなのに。

信じられないことにあの女が見てるのは、平々凡々を絵に描いた俺の兄、たかくらいい高倉零なのだ。

彼女は何でも出来る俺が好きだといっているのに、いつだって兄だけを見ている最悪な審美眼の持ち主だった。

「　　ね、和也」

「・・・何だ」

「あそこ、見て」

「あん？」

二人きりの生徒会室。

他のメンバーは仕事を終え、夕闇に染まりつつあるこの部屋に居るのは現在俺と珠洲だけ。

柔らかな茶色の髪が夕日に照らされ赤みを増し、白い頬も淡く染まる。

大きな瞳を彩る長い睫毛は可憐に揺れ、長年幼馴染として過ごしている俺ですら見惚れてしまう完璧な美を持っていた。

片手間で仕事を片付けつつも、俯いた体勢のまま上目遣いでうつとりとその光景を見詰めていた俺は、珠洲の呼びかけに顔を上げると堂々と彼女を瞳に映す。

そしてどんな女でも簡単に落とせる極上のスマイルを浮かべ、愛しげに彼女を見詰めた。

そんな俺の笑顔にはにかむように微笑み返した珠洲に、心臓の鼓動が跳ね上がる。

普段からつれない素振りを見せている彼女が漸く俺へと傾いたかと信じかけた瞬間。

「あそこ。零君が居る」

嬉しそうに、恋する乙女そのものの表情で窓から外を指差した珠洲は、椅子を窓に近づけるとうつとりと微笑んだ。

その笑顔はとても柔らかく温かく、自分に決して向けられない美しいもので。

悔しさにぎりぎり唇を噛み締めながら、彼女が指差した方向に体

を向けた。

窓から見下ろした場所には、確かに兄の姿があった。

ぴんぴんと好き勝手に撥ねる真っ黒な髪をし、瓶底眼鏡を掛ける中肉中背の兄の姿が。

薄汚れたジャージ姿で首からタオルをたらした姿は、どこのおっさんだと突っ込みたいくらいに親父臭くだらしない。

汚れたままの軍手で拭ったのだらう、顔にもところどころ土がつき、髪には草が絡みついている。

グランドの片隅。練習中の運動部からすら目を向けられない位置で一人黙々と仕事をしている彼は、園芸部の一員だ。

否、正確に言うなら幽霊部員だけで構成されているあの部活が、部費こそ与えられているが同好会以下だらう。

実際見目を良くするためにと運営費を与えているが、彼と園芸部の顧問以外に仕事をしている場面を見たことが無く、きっとこれからも見ないだろうと予測する。

ちなみに兄が大好きな隣の幼馴染は、入部したはいいが彼女目当ての人間が多すぎ、兄に迷惑を掛けないためにと泣く泣く初日で退部した。

賢明な判断だったと思う。

「零君、頑張ってるね」

自分ごとのように嬉しそうに顔を綻ばす珠洲に、胸の奥からどろどろとした重たい何かが沸き起こる。

こんな感情嫌なのに、彼女が兄を誉めるたびタールみたいな重く纏わりつく黒いものがあふれそうになった。

珠洲は、もう随分と長い間兄に片思いしている。

遡ると幼稚園時代にはもう『れいくんのおよめさんになるの』と言っていたので、きっとその前からだろう。

彼女の兄に対する感情は一途で、だからこそ引き際を心得ている。珠洲が生徒会に入部したのも、校庭に面したこの場所からじっくりと兄を眺めるためだと知っていた。

「いいなあ、先生」

ぼつり、と呟く声に意識を戻しもう一度視線を向けると、先ほどまで一人だった兄の下に白衣を着たもう一人が近づいていた。

生徒会顧問も務めるその教師を俺も良く知っているが、あの胡散臭い笑顔のままであの男が植物を弄る様は何度見ても慣れるものではない。

常に汚れ一つ無い白衣を着こなす優男風の彼は、土など触ったことなどありませんという笑顔で淡々と土を掘り起こした。

夏に向けて新しく苗を植え替えている最中らしく、幾つものポットが傍に置かれている。

園芸部の園芸活動は地味であるが、咲いた花は綺麗だった。

誰にも目に留められない地味な作業。それは兄にとっても似合うが、俺には決して似合わない。

もし珠洲が園芸部に入部していれば、俺も後を追って園芸部に入部していたので、彼女が退部したのは兄にとって幸いだろう。

何せ園芸に興味が無い男女で溢れてしまったら、彼の唯一に近い趣味の場が潰れてしまっただろうから。

一つため息を落とすと、彼を眺めている珠洲に視線をやった。

窓を開けずに縁に肘を置きじつと兄を見下ろす彼女の瞳は切なさに揺れている。

どうしてなのか、俺はその理由も知っていた。

珠洲は、可愛すぎる故に兄に声を掛けられない。

彼女が小学生だった時分、兄は盛大にいじめを受けた。

理由は馬鹿みたいに単純で、人気のある珠洲が兄を好きだと言って憚らないのに他の人間が嫉妬したからだ。

珠洲は昔から可愛く賢く何でもそつなくこなした。

そして反対に兄は何をしても平均で、彼女の隣には相応しくないと赤の他人が判断した。

子供は時に愚かで残酷な生き物に成り果てる。

自分が正義と信じた彼らは、毎日兄に嫌がらせをした。

初めはきつと些細なものだったのだと思う。

珠洲に気づかれないうちに少しずつ少しずつ発展していたそれに、彼女はある日気づいてしまった。

兄が血塗れになり救急車で運ばれたのは小学校六年の秋だった。

階段を降りる途中で背後から突き飛ばされ、階下に叩きつけられたのだ。

その瞬間を、珠洲は見えていたらしい。

そしてそれをした相手に理由を聞き、俺のところで大泣きした。

毎日毎日兄が退院してくるまで泣いて、そしてある日、兄に関わるのをやめると誓った。

大きな瞳を充血させて頬どころか鼻の頭も真っ赤に染めて、泣きすぎて掠れた声で必死に俺に訴えた。

『わ、だじ、もう、零君、に、ちかづかない』

嗚咽交じりのその言葉を、彼女を胸に抱きこみながら俺はじっと聞いていた。

それを聞いた時の感情は複雑すぎて今でも語れない。

ただ一言、そうか、と呟くので精一杯だった。

あれか五年経った今も珠洲は忠実にその言葉を守っている。

遠くから兄に害が及ばないようにじっと見詰めるだけで、何一つ関わろうとしない。

同じクラスになっただけで嬉しくて報告に来るくせに、進学校と言われるこの学校よりも何ランクも上を狙えたのにそれすらせず兄を追いかけたくせに、それでも離れてただ見詰めるだけ。

ただそれだけで嬉しそうに幸せそうに微笑み、じっと静かに時間を過ごす。

学校ではすでに俺と珠洲が付き合っていると噂が立っている。

俺も珠洲も肯定しない代わりに否定しないから信じる人間は大勢居た。

それは一種の虫除けで、互いを護るための防御壁でもあるが、事実無根だと俺は知ってる。

他の誰でもなく、一番信じたい俺が理解していた。

「珠洲」

「・・・ん？」

「今年は何の花が咲くだろうな」

「そうだね。楽しみだね」

ふわり、と笑う彼女は知らない。

夏には絶対向日葵を咲かせる兄の心を。

春にはヒヤシンス、秋にはコスモス、冬にはスノードロップと植える兄の気持ち。

そして俺も教えない。

兄が誰を見ていて、どうしていじめを黙っていたかを。

腕を伸ばし柔らかな髪を指先で摘む。

少し癖のある触り心地のいい髪は、甘いバニラの香がした。

甘えるように頬を摺り寄せ、きゅっと珠洲を抱きしめる。



「どうしたの？」

「ん・・・ちよつと疲れた」

自分より40cm近く背が低い珠洲をきゅつと抱きしめる。

顎を頭に乗せると重いよと文句を言われたが、それでも宥めるように背が撫でられた。

何故、彼女じゃなければ駄目なのだろう。

俺に告白する女は沢山いて、俺を好きだという女は沢山いるのに、俺が求めるのはいつだって彼女だけで、他の誰かは欲しくない。

珠洲に見てもらったために頑張ってるのに、誉めてくれても彼女は俺を見たりしない。

いつだってその眼差しは、一直線に兄の下。

顎を下ろすと柔らかな髪に頬を摺り寄せた。

心地よい感触に没頭していると、不意に布が頬を掠めじとりと眉間に皺を寄せる。

いい気分はあつという間に消え去り、代わりに切なく苦しく泣きたくなった。

「お前は」

「うん？」

「ずっと、このリボンしかつけないんだな」

幾度髪飾りを贈っても、彼女は絶対に身につけようとしない。

珠洲が髪に飾るのは、いつだってただ一人から贈られたものだけだ。

桜色、赤、白、水色、黄緑、チェックにレース。

幼稚園から贈られ続ける、彼女が愛する特別の証。

日によって変わるそれが何を意味するか、俺ははっきりと知っている。

「だって、私にはもうこれしかないもの」

泣きそうな顔で笑う彼女すらこんなにも愛しいのに。

手に入らない宝物に、声を上げて泣けたらすっきりするのだろっに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1592n/>

---

俺とお前と俺の兄

2010年10月10日20時56分発行